展 景

季 刊

No.104

Winter 2022

季刊　展景 104号

目次

ピラカンサ〈短歌〉……市川茂子　4
『佐藤惣右衛門物語』〈短歌〉……梅津純子　6
小さな隣人たち〈短歌〉……大橋千佳子　8
のっぺい汁〈短歌〉……小野澤繁雄　10
秋惜しむ〈短歌〉……河村郁子　12
菅野芳秀さんの新刊を寿ぐ〈俳句〉……新野祐子　14
羽州街道〈短歌〉……布宮慈子　16
〈那須通信 49〉一枚のイラストを捜して……加藤文子　18
〈薫風颯々 24〉「ふーみん」のこと……神村ふじを　24
〈近江気まぐれ文学抄 48〉今村翔吾『塞王の楯』……新関伸也　30
〈スイスからの便り 4〉降臨節の季節……ギンジック恭子　36
対詠　ごきげんいかが？　PART 80……小野澤／布宮／河村　42
前号作品短評A……44
前号作品短評B……47
エッセイ教室「清紫会」の作品より
食べること色々……市川茂子　50
無二の会短信……52
編集後記……58
今号のイメージ／ソバ

ピラカンサ

市川茂子

忘れたるヨーヨー一つ箱の上に幾日か丸く徐々にしぼめり
衆院の選挙の勝敗きまる夜の悲喜こもごもに神無月終ゆ
貰い来しザクロ二つを飾り置く一つが割れて赤き種はじく
鳥の目の届かぬところピラカンサ鈴なりにして朱の実映ゆる

陽だまりの花に群れいるシジミ蝶一匹はぐれて吾が前に飛ぶ
晩秋の陽はたちまちに傾けり路地の家々音とざされて
目交(まなか)いに雲一つなき冬の空マスクはずして息深く吸う
刻々と変る冬空沈む陽を鈍色(にびいろ)の雲が閉ざし暮れゆく
九十の齢は古きこと忘れ新しきもの二つ三つ知る
人来ぬ日カレンダーに印付けてゆく幾日つづくか音なく過ぎて

『佐藤惣右衛門物語』

梅津純子

国敗れ貧しき里に届きたる赤や黄色のキャンデー香る

惣右衛門大伯父の写真床の間に掲げてありき遠き眼をして

十八にてカナダに渡り白人の納屋に泊まりてただ働きせしとふ

惣右衛門地歩を築けば一族らカナダに渡る父生れし国

セーラー服とドレス愛らし三歳の父と五歳の伯母の写真（うつしゑ）

カナダにて築ける富も家すらも奪はれ追はる祖国との戦に

敗戦の祖国の親族（うから）案じつつキャンデー送りしか財失く老いて

先達者惣右衛門ありて新田次郎の『密航船水安丸』生るる

「水安丸渡海百年」裔われら五百人集ふバンクーバーに

夫（つま）と兄苦節の『佐藤惣右衛門物語』つひに今世に出（い）づ

小さな隣人たち

大橋千佳子

数年を懐かぬ猫は今朝もまたオクラの列より伺いおりぬ
語れども視線合わせぬ子あるごと実家の猫は守る距離もつ
空腹にすり寄る猫に目で語る「嬉しいけれど間違えてない？」
裏口の三和土（たたき）は南秋日和縄目の蛇の腹つややか

三度目の出会い互いに無視をして三和土のトカゲと日向分け合う
苗植えのミニヒマワリは低くしてＬＰ盤の花を咲かせる
丈高き百日草の株元にアネモネの球密に植え込む
干からびて棘に刺されし蛙あり山椒を喰む幼虫の下
身を隠すすべなき細き山椒に五齢となりぬキアゲハの子は
落葉の庭に山椒の香のほのか縄に括られし細き枝より

のっぺい汁

小野澤繁雄

コインランドリーにきていれば人の出入りはマシンうごいてそれより少な
眺望はあるともないともくもりそら鉄塔がみゆそれもいくつも
いったんは拾いしものか小園はベンチ下にちらばれるドングリら
あばれがちそれを撓(たわ)めて生垣は桑の木ならん波打つごとし

おもいおもいに一人なれどもしる人もしらぬ人も年寄り園の人たち
まつの平ここの平も山のうち平名にもつ団地つづいて
十月になりても疎ら十月桜名札がいるような花付き疎ら
「自分の家って感じしない？」浪江町請戸小にきてあの日小三ら
国道はサイクリストの二人連れ一人は長い髪もつとしる
寒さつづきもまだ夜のこと里芋のぬめりをのみにするのっぺい汁

秋惜しむ

河村郁子

ひさびさに歩み伸ばして訪ひ来たる「田中山憩いの森」に人影のなし

秋深き森の小径を歩みつつラッキーソング口ずさみをり

十年も前のこととて亡き犬と無心に走りまはりしころ憶ふ

この年の短き秋らし地に落つる多き病葉（わくらば）あはれ哀れよ

子楢木の根方にどんぐり五つ六つ暮れの秋なる風情をかもす

わが愛づる山桜の古木の根方より四方（よも）に広ごる姿に礼（ゐや）なす

折にふれ揺らぐ心を語りしに受け止めくれしもひたに黙せり

若き日に絶たれし恋のあとのごと秋寂びの森に静けさみつる

ゆくりなく斜光射しきて枝先の残んの老い葉はつか照らせり

冬隣る日の散策にわれ独り心温みて歩みの軽ろむ

菅野芳秀さんの新刊を寿ぐ

新野（にいの）祐子

「七転八倒百姓記」という著馬肥ゆる
朝虹へ新聞配る苦学生
木枯や餃子と読めずさめこと叫ぶ
石呉れし妻との出会い草萌ゆる
インティファーダ三里塚にて鳥雲に

うりずんの沖縄に知るこころざし
ふるさとは帰るべき場所青田波
異分子と呼ばれたくなし田水沸く
厨妻ら強し地域を変える花
長井発レインボープラン地球回る
病癒ゆ雪解野に在る山の神
「のどか」「春平」名前に籠めしタスキ渡し
人魅する話術なお冴え黄落期
自分史は一篇の詩よ星流る

羽州街道

布宮慈子（やすこ）

山形へ戻り十年たちしこと今朝は思ひて起き出でて来つ

十年を近くに居りて母ふたり見送りしこともひとつの幸運

常日ごろ通つてゐる道の始まりと終はりはどこぞ羽州街道

福島の桑折（こをり）より宮城をかすめ、山形、秋田を通り青森・油川（あぶらかは）まで

目の前の羽州街道いまにして狭き道なり車の行き来に

街道沿ひに数多（あまた）ありたる商店の名のみ残れる上町（うはまち）界隈

上町の勢至（せいし）堂こそ午年の守り本尊まれまれ参る

勢至堂の真向かひにある荒物屋に冬前なれば橇（かんじき）下がる

老舗なる蕎麦屋の多き道なれば密かに呼びぬ蕎麦街道と

一月の勢至堂の堂籠もり「おにぎり奉納、辞退」と知らせて

〈那須通信 49〉

一枚のイラストを捜して

加藤文子

独立して間もない頃、随想編と題して短いことばに挿絵を添えて私家本をつくった。

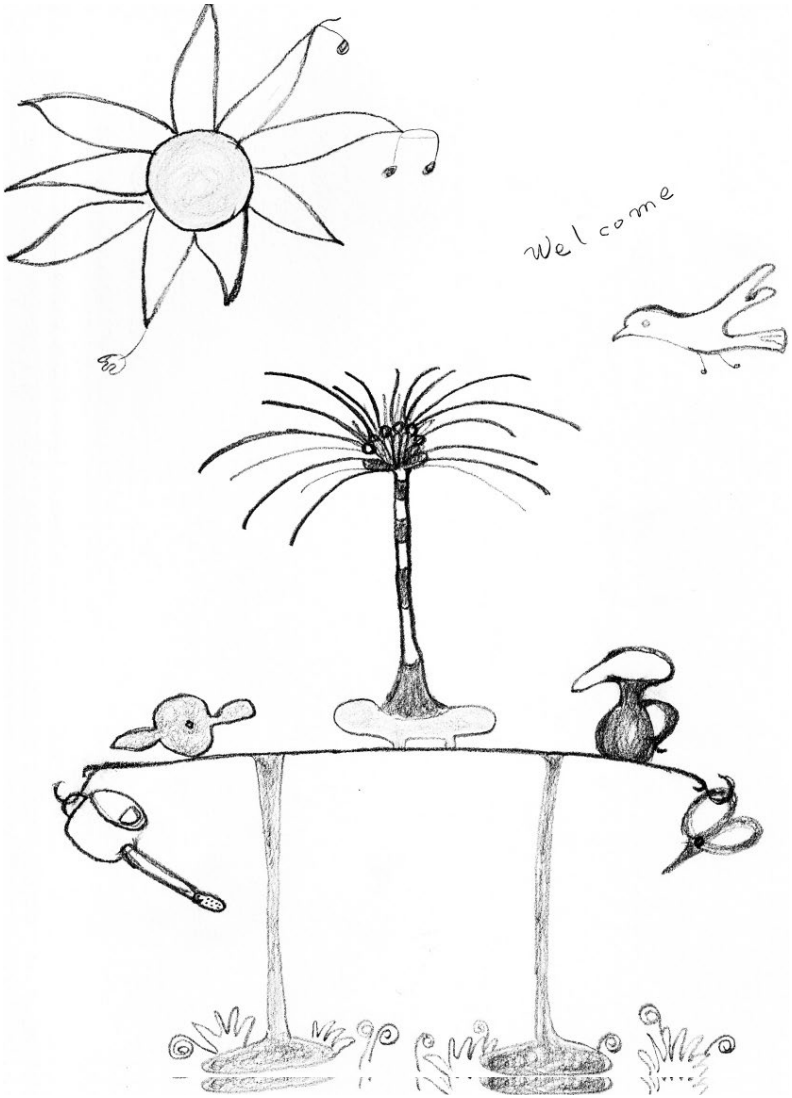
このごろになって、もう一度つくり直してみたいと思うようになった。

そんな中、四十年ものあいだ奏デル盆栽（私の育てる盆栽の総称）をモノクロで撮りつづけている岩瀬陽一さんの依頼で、写真にことばを綴るカタチで一冊つくることになった。ならば私家本のことばを使用させてほしいと提案したところ、快諾してくださった。

はなしが決まってからは、はやい。

アシスタントの山田さんの手を借りて、岩瀬さんとパソコンで一ヵ月余りやりとりした末、新たな装いで奏デル盆栽随想編が完成した。

表紙のタイトルロゴは、故・高木和雄さん。高木さんも岩瀬さん同様、二十代からのつきあい。かつて岩瀬さんの奏デル盆栽の写真と加藤のことばを合わせて、高木さんのブックデザインで本を



「随想編」- はじめに - にイラストを添えて

つくろうと計画していた。プランが実現しないまま高木さんは突然逝ってしまった。そんなこともあり、随想編の表紙は高木さんのロゴを使わせていただきたいと思った。

ページや文字構成など全て私たち素人が編集した事情から、出来映えは反省の多いものとなった。それでもカタチにできたことはうれしい。私家本をつくり直したいという思いはあっても、こんなきっかけがなかったらなかなか実現しなかったかもしれない。

間もなくして、益子のギャラリー noie（ノイエ）から随想編制作記念の企画展のお誘いをいただいた。

noie は立体作品を中心に発表している中村学さんと、編集者の東村直美さんご夫妻が運営するモダンな空間のギャラリーである。東村さんには本の出版でもお世話になってきた。noie では中村さんの立体と、夫・小沼の陶、そして私の植物で三人展を何度かさせていただいている。

今回は随想編の内容にそって写真とことば、それにイラストを額装して展示する。棚上にペイントした箱や小さな絵も飾らせていただくことになった。ランダムにまとめたファイルも用意する。

会期まで時間はある。楽しいこと考えながら準備したいと思った。

まずは随想編に登場する五枚のイラストの額装からはじめよう。描きためたものを保管している大きな箱からイラストを捜し出す。五枚のうち四枚は難なく見付けることができたのだが、どうしても一枚見付からない。二つに分けた箱のどちらにもない。見落としはないかと再三にわたり確認

したのだが、結果は変わらない。紛失してしまったのだろうか。

和室の戸棚のファイルを集めた所かもしれないと思い直し、ファイルひとつひとつに目を通す。久々開いてみたら、今となっては要らないものがたくさんある。中身を確認しながら仕分けをする。イラスト捜しはいつの間にか、戸棚の整理に転じていた。

狭い和室は不要となった資料で足の踏み場もない。

せっかく仕分けをする気になったのだから片づけてしまおうと、奥の方のファイルも取り出してみる。すると一九八六年、独立に際して考案してくれたウィリアム・モリス風の奏デル盆栽のロゴマークや、今回随想編で使用したタイトルロゴのコピーをはじめ、三人でつくろうとしていた本のコンセプトを記したレポートなどが見付かった。

つづいて独立した頃の借家や幼い盆栽の並ぶ庭の写真、当時配布していたガリ版印刷の「奏デル通信」の下書きなど、noie 用ファイルに打ってつけの資料が次々に出てくるのだった。

片づけの傍らファイルづくりに精を出していた。不要なものの整理が大方ついた頃には、noie 用のファイルが出来上がっていた。

残るは棚の隅にある数冊の古びたスケッチブック。描きかけの紙が数枚のや、表紙だけで中身のないものもある。黄ばんでいたり、シミになったり、取っておいても仕方のないものばかりだった。

最後の小さなスケッチブック。これも要らないナ、と思いながら開いたら、なんと捜していたイ

ラストが取り残されたように一枚だけはさまっていた。

どうしてこんな所に、こんなふうに……。しかもヨレヨレになった小さなスケッチブックに描いた覚えは全くなく、記憶ではイラストはもっと大きなもののはずであったのだが……。最後の最後になって思いがけない結末を迎える。

こんなことが時々起こるから、生きていることはなおさら楽しい。栗の花が下がり、ススキの穂が立ちはじめる初秋のはなし。

このほど製作した「随想編」の表紙

〈薫風颯々 24〉

「ふーみん」のこと

神村ふじを

この週末上空に強い寒気が入り込み、11月27日、初雪を観測した。山形地方気象台の発表によると、平年より11日遅く、去年より2日早いとのことだった。このところ異常なほどの冷え込みが続き、家の周辺は朝方びっしりと霜が降りていて、いつ雪が降ってもしょうがないと思っていたのだが、いざ降ってみるとさらに寒さが増した。

新潟県境に聳え立つ朝日連峰の峰々はすっぽりと雪に覆われ、麓の町に吹き下ろすのを今か今かと待っているかのようだ。

教育委員会に毎日出勤しているが、お昼は家に帰って「ヒルメシ」を食べている。「ヒルメシ」と書いたのは、お昼のＮＨＫ総合テレビで放映している中井貴一の「サラメシ」の大ファンで、それを真似て書いてみたところである。

「サラメシ」の最後の5分間には「あの人が愛した昼メシ」というコーナーがあって、作家や作曲家など近年お亡くなりになった著名な方々が生前度々訪れた店を紹介する内容になっている。最近では半藤一利さんや服部克久さんが足繋く通った店が取り上げられていた。

このコーナーのバックに使われているパイド・パイパーズの「ドリーム」がまたいい。洗練された都会的なコーラスの中から、今は亡き著名な方々の生前の姿が目の前に浮かび上がってくるようで、その不思議な感覚に得も言われぬ気分になってしまう。

10月21日（木）のお昼の時間に、イラストレーターの和田誠さんが愛した台湾料理の店、東京南青山の「ふーみん」が紹介されていた。私は初めて見たのだが、2年前に放送されていて今回は2回目か3回目なのだそうだ。

実は和田誠さんの『お楽しみはこれからだ』が書棚に何巻かあって、それには往年の映画の名セリフやその映画に出演した俳優のエピソードが分かりやすく紹介されている。

イングリッド・バーグマンとハンフリー・ボガートの「カサブランカ」やマリリン・モンローの「お熱いのがお好き」などが取り上げられていて、故高瀬鎮夫さんが「ジョルスン物語」の中の台詞「You ain't heard nothin' yet.」（あなたはまだ何も聞いてはいない）」を「お楽しみはこれからだ」と訳したことが本の題名になっている。また、和田誠さんはたばこの「ハイライト」のパッケージをデザインしたことでも知られる。

東京に行く機会があったので、「ふーみん」を予約した。表参道の駅から5～6分、南青山の小

原流会館地下1階に「ふーみん」はある。

ネットの情報では、店を始めたのは斉風瑞（さい　ふうみ）さん。台湾出身の両親の下で5人の兄姉妹といっしょに育ち、元々は美容師だったらしいが、ある時、遊びにきた友達に料理を振る舞ったら、「こんなにおいしい料理を私たちだけで食べるのはもったいない」と言われたのが転身したきっかけ、とあった。

また、開店当時からファッション、出版、音楽業界をはじめ文化人や芸能人が、「ふーみんママ」の料理に癒やされ続け、初めての客でも一瞬で打ち解けてしまうほどの屈託のない笑顔で、世間話から悩み相談まで聞いてくれるフレンドリーなママだったらしい。ママは、70歳になったことを機に甥の瀧澤一喜さんに「ふーみん」を譲ったが、今年武蔵溝ノ口にこぢんまりとした台湾料理店「斉」を開いたという。

「ふーみん」のオーナーになった瀧澤さんは、ママ同様大変気さくな方で、夫婦で訪れた私たちに声を掛けてくれた。きっと周りとは異質な上京感でも漂っていたのだろう。私は、「サラメシ」を見たこと、和田誠さんが通った店なので一度来てみたいと思ったこと、などを話した。

瀧澤さんは、「和田さんはいつもそこで食べてましたよ」「奥様のレミ（平野レミ）さんは今でも時々来てくれます」などと気さくに話してくれた。

妻もどこからか情報を集め、「ふーみん」の人気メニューの納豆チャーハンを注文。「納豆の嫌

味が全然ない」とパクついていた。「うちの方の郷土料理に納豆汁というのがあるんですよ」と紹介すると、「どちらからですか？」とオーナー。「山形からです」「山形からですか……。山形はどちらですか？」「寒河江の隣の左沢（あてらざわ）です」「へえー、そうですか。実は私の叔父が寒河江でして。だからかあ、納豆チャーハン大好きなんですよ」

瀧澤さんが言うには、先代のママには男1人女4人の兄妹がいて、瀧澤さんの母はすぐ下の妹であり、一番下の妹の旦那が寒河江市の出身であると話をしてくれた。

私も今は大江町に住んでいるが、元々は寒河江市の生まれなので、なぜかうれしくなり、妻から肘をつんつんされるも、「叔父さんの名字は何ですか？」と厚かましく聞いてしまった。そしたら、「國井です」と即答してくれた。

「國井なら、西根地区の宝（たから）か高松地区の八鍬（やくわ）のどちらかですね」「へえー、そうなんですか。名字で分かるなんて面白いですね」とオーナーは後ほど叔父さんの出を尋ねて、私にメールしてくれることになった。

アルコールも手伝ってかなり雄弁になってしまい、東北人の奥ゆかしさなどどこへやら……。

和田誠さんのご長男のお嫁さんは女優の上野樹里さん。山形県置賜地方を舞台にした「スウィングガールズ」の主演女優だった。何となくまた縁を感じたりしながら、「ふーみん」を後にした。

翌日、「叔父に早速電話を入れまして、左沢の方が来てくれたと伝えましたところ、大変驚いて

おりました。叔父は八鍬というところだそうです。左沢線の駅が高松だと言ってました」と丁寧にメールをいただいた。

私は、「わがままに早速対応していただき、感謝申し上げます。私自身は生まれが寒河江で、祖父が八鍬の國井家から婿に入ったので、もしかしたら八鍬の方だったらな、と思っていました。親近感も湧きましたし、ひょっとしたら遠い親戚かもしれませんね」

返信に、「メールありがとうございます。叔父がさらにびっくりしています。叔父は、『親近感が湧くよね。八鍬は國井姓が多いので、縁があったらすごい！』とのことでした」とさらにメールをいただいた。

東京には山形から出てきた人など結構な数いるのだろうが、何も分からずにただ過ごしているに違いない。他愛のないあまり意味のない話だと思うが、何気ない会話の中に親近感を感じることができて、しかも東京の南青山で……。という田舎者の話ということで、ご勘弁を願いたい。

〈近江気まぐれ文学抄 48〉

今村翔吾『塞王の楯』集英社

新関伸也

滋賀県の県庁所在地は大津市だが、東海道新幹線の駅はない。関ケ原に近い米原駅から京都駅まで一気に走り抜けるため、大津は素通りする。大津の人たちも電車で十分の京都駅に行けば事足りて、特段不便を感じてはいない。古来、天智天皇の大津宮がおかれ、比叡山、日吉大社、三井寺、石山寺など有名な寺社も大津にあるが、駅周辺はひっそりとしている。その大津駅を琵琶湖に向かってまっすぐ下っていったところに、かつて大津城があった。そこを舞台にした戦国時代の物語である。

一五八六年羽柴秀吉は、琵琶湖の大津の港を大坂と結ぶ水運の要所と考え、坂本城から城を大津に移していた。その四代城主は、近江八幡から移った宇多源氏佐々木氏の流れを汲む京極高次である。妻は浅井長政の二女お初。お初の妹は家康の息子秀忠の妻お江。一方、高次の妹は秀吉の側室となる。つまり京極高次は、豊臣と徳川の両家と姻戚関係にあったことが、話を複雑にする。

秀吉の没後、反徳川の大名が石田三成を中心に結集して、家康の家臣がいる伏見城を攻撃する。西軍に属していた高次は湖北まで兵を進めたが、一転して琵琶湖を渡って引き返し、家康との密議により大津城籠城を決意して西軍と戦うこととなる。籠城は、ひたすら籠もって城を守ることである。その守りの最大の砦は、石垣である。石垣は石を積み上げ建物の基礎となるだけでなく、堀を巡らせ、城のつくりを決める総合土木の技を必要とする。高次は、城兵三千余りとともに籠城にあたって、その仕事を穴太衆に命じるのである。

一方の一万五千人の西軍は長等山に本陣をおき、東軍に寝返った大津城を総攻撃する。容易に落城しない大津城に業を煮やし、長等山から国友衆による大筒を打ち込んでいく。だが落城前に和睦となり、高次は開城に応じる。すでに関ケ原の戦いは始まり、西軍を大津城で足止めしたことで、天下分け目の戦いは東軍が優勢となり勝利する。高次はこの開城を悔いて高野山にこもるが、家康に籠城の功績を認められ、のちに越前小浜城主となって江戸時代まで生きのびた。

この大津城を巡る攻防戦をモチーフにして石工と鉄砲職人を主人公として、本書の物語は展開する。作者は今村翔吾。一九八四年京都府生まれで大津市在住。ダンスインストラクター、作曲家、守山市での埋蔵文化財調査員を経て、二〇一七年『火喰鳥　羽州ぼろ鳶組』でデビューする。翌年

『童神』（刊行時『童の神』に改題）で第一〇回角川春樹小説賞を受賞、同作は第一六〇回直木賞候補作となる。その後『八本目の槍』『じんかん』を著し、「羽州ぼろ鳶組」の江戸火消しシリーズで特に人気を集めている若手歴史小説家である。

『塞王の楯』の主人公は、石工の飛田匡介である。石工と言っても、ただの石工ではない。近江比叡山坂本近くの穴太という土地に根を下ろし、代々石垣作りを専門とする「穴太衆」である。依頼主は大名や寺社が中心で、雇われれば全国どこへでも出かけて堅牢な石垣を積む職人衆である。「野面積」という自然石を生かした技法を得意とする。石積みは「一つ一つの石の声をきく」ことから始まるというように、石のくせを巧みに組み合わせて、崩れない石垣をつくることに長けている。

時は十六世紀の織豊時代。世は戦の連続である。越前一乗谷城が信長から攻められ落城し、城下も焼き払われた頃、幼い（飛田）匡介は、象嵌職人の父、母と妹を失う。孤児となった匡介は、穴太衆の頭、飛田源斎に拾われて、我が子のように育てられる。

成人し才覚を伸ばした匡介は、穴太衆二十数組の一つである飛田屋の後継者と目される。飛田屋は石垣集団の中でも「積方」と呼ばれ、石組を専門とする。同じ穴太衆でも、石を積む「積方」のほかに、石を切り出す「山方」、現場へ石を運ぶ「荷方」と分かれている。「山方」「荷方」「積方」の三者の仕事がうまくかみ合ったときに、はじめて堅牢な石垣が完成する。

飛田屋の頭目である源斎に、鉄壁の石垣を積む技で右に出る者はいない。畏敬を込めて人は彼を「塞王」と呼ぶ。塞は、賽の河原を意味し、「塞の神」を穴太衆は篤く崇めていることから、そう呼ばれた。塞王こと源斎から技を学んだ匡介は積方であるが、山方や荷方の仕事を知ってこそ、積方ができる、ということで一通りほかの仕事を経験させられる。

穴太衆は、実力の世界である。血筋であっても無能な者は後目を継げない。その点において、匡介は優れた積方であった。源斎の甥の玲次は、匡介と積方を争ったが、源斎の後を継ぐのは匡介で、玲次は荷方の小組頭となっていく。

この穴太衆飛田屋に、大津籠城を決めた京極高次より仕事が舞い込む。強固な守りを固める石垣工事である。大津城は琵琶湖岸の水城のため、特別な堀水路を伴う石垣作りであった。水城の石垣を補強し、また籠城に耐える石積みを請け負うのである。戦が始まると匡介を筆頭に穴太衆は、城に籠もり鉄砲玉をかいくぐりながら、石垣を補修し、石を積み、果敢に己の仕事を全うしていく。

一方、「国友衆」である。西軍に大量の鉄砲を売りさばいていた鉄砲鍛冶の集団で、近江の北、今でいう長浜市にある国友村が本拠地である。一五四三年に種子島に鉄砲が伝来してから、国内随一の生産を誇るまでにその技術を上げていた。その製造に拍車をかけたのが、信長による一五七五年「長篠の戦い」である。大量の銃による「三段式装填法」によって、連射が可能となった。弓や

槍にとってかわった鉄砲は、この時代の最新兵器となり、その調達が戦いを左右したのである。鉄砲が戦国時代に終わりを告げていくといっても言い過ぎではない。

小説では、「砲仙」の名を持つ国友三落が国友衆の頭目で、次期頭目の彦九郎（げんくろう）が匡介に対峙して活写される。ただこの時代の銃は、火縄銃である。マッチロック式といい、火縄で黒色火薬に着火して玉を発射させる仕組みであった。撃ち終わるたびに火薬と玉を詰めるため、連射ができない銃である。その間に敵に弓や槍でやられてしまうこともある。連射の欠点を補うのが、三名一組交代で撃つ「三段式装填法」であった。「撃つ、玉を込める、火縄をつける」、順番に行うことで、敵に攻め込まれることが激減したのである。信長はこの撃ち方を取り入れて、相手を倒して勝利を収めていく。鉄砲製造と火薬調合を引き受けた国友村は、一村が兵器工場となっていた。何百、何千挺という鉄砲を大名の求めに応じて作り続けていた。

大津の戦いでは、国友村で培われた鉄砲技術を最大に生かして、今でいう大砲の大筒は作られている。彦九郎らによって長等山に持ち込まれた大筒は、全長九尺九寸（約三メートル）、太さは一尺一寸、口径は二寸九分九厘というから、ただものではない。火縄銃の何倍もの威力を発揮する。その火を噴く大筒は匡介らが守る大津城の天守めがけて、山の上から容赦なく打ち込まれる。

この大津城の籠城戦で城を守る石垣積みに奔走するのが匡介である。命がけで石を積み上げ、直し、崩されては積み上げる匡介ら穴太衆の姿からは、城を守り抜く意志の強さがにじみ出る。一方の大筒を撃ち込む国友彦九郎らは、籠城を諦めるまで攻め続けると覚悟を決め、玉を放つ。が、やがてその攻防のなか、敵側の説得に応じた高次は、開城を決意して、明け渡すことを決意する。

守りと攻めの応酬で繰り広げられる大津城を舞台にした人間模様を熱い思いで作者・今村は書き切っている。互いの職責に忠実な二人の職人魂には、最後の停戦という希望がちらついている。勝敗に行き着く「攻め、守り」の矛盾の中で互いの力を認めあっている匡介と彦九郎。同じ近江に生を受け、琵琶湖を眺めて過ごした凄腕職人たちは、権力者に翻弄されつつ敵と味方となって争っている。戦は、多くの人々の命を犠牲にし、骨肉相食むのは常だが、反対に穴太衆や国友衆が技を磨いたことも事実であった。危機に直面したときに見られる矛盾や人間の有り様を教えてくれるのも、歴史小説の醍醐味である。

集英社（2021）

〈スイスからの便り 4〉

降臨節の季節

ギンジック恭子

11月は、こちらでは気持ちが沈みがちになる人も多いようだ。ひとつの理由としては、霧の日が続くせいだと思う。少なくとも、私がよく知っているチューリッヒ市内とその近郊は、太陽の見えない日が多い。だが、霧の上は晴れていることがよくあるので、機会があれば、人々はこぞって標高の高い場所に出かける。チューリッヒから電車で40分ほどのアインジーデルンなどもそんな場所の一つだ。シュヴィーツ州にある大聖堂と修道院で有名な町である。霧に覆われた土地を抜け出して、標高およそ880メートルの町への道中、車窓の眺めが突然開けてくるのが爽快だ。

一方で11月には、そのどんよりとした暗さに明かりを灯すような行事もいろいろある。有名なものの一つは、チューリッヒ湖沿いの町リヒテルスヴィルの蕪祭（かぶ）り。この町の蕪祭りは長い伝統のあるお祭りで、近隣だけではなく、遠方からも見物客がやってくる。11月初旬の土曜日に行われる

チューリッヒのイルミネーション

この行事のために、11月に入ると町を挙げての準備が始まる。町には、地域伝統協会だったり、スポーツ関係のクラブだったり、文化交流クラブだったり、いろいろな団体があるが、それらが総出で参加する。町役場が調達した蕪が配られて、それぞれが意匠を凝らした山車を作る。その年の有名人だったり、話題になった出来事だったり、テーマは様々だ。中をくり抜いて蝋燭を入れた蕪を看板に掛けて、大きなオブジェを制作する。コロナのために去年は中止、そして今年は、行列はなくて展示だけだったそうだが、例年は山車を引いて町の目抜き通りを行進する。地元の幼稚園や小学校の児童たちも、クラスごとに、それぞれが自分でくり抜いて明かりを灯した蕪の提灯を下げて、行列に加わる。中をくり抜いただけではなくて、表面に凝った模様をあしらった蕪もある。始まりの夕方6時になると、行列の通りに面した家々は一斉に電気を消すのだが、それぞれの家の窓

には、蝋燭を灯した蕪がズラッと置かれていて美しい。見終わった後は、見物客たちは屋台の焼きソーセージやホットワインなどを楽しむ。

いよいよクリスマスまで4週間、アドベント、降臨節が始まった。家庭では、アドベントキャンドルが灯される。最初は1本、次の週にもう1本、またもう1本、そして最後の週には、4本全部のキャンドルに火を灯す。町や村はイルミネーションに彩られる時期だ。

チューリッヒ中央駅から湖までまっすぐ伸びた目抜き通り、バーンホフシュトラッセの空には、Lucy in the Sky with Diamonds と名付けられた電飾が煌めく。私がこちらに来てから、3代目のイルミネーション。初代を見たときの感激は忘れられない。空いっぱいに無数のオレンジ色の小さな豆電球がキラキラと輝き、星降る街とは、まさにこのことかと見惚れた。と同時に、異国に来たのだなという実感が湧いたものだ。その後、使い古されて傷んできたことと、電力を食うことを理由に、蛍光灯に変わった。芸術的ではあるが、氷柱のように空から垂れ下がる筒型電灯は冷たい光を放ち、寒くて暗い夜をいっそう際立たせた。案の定、あまり評判はよくなかったようだ。数年後に今のイルミネーションに取り替えられたのは、それもあってのことだろう。節電のためにＬＥＤ照明で、控えめな煌めきが、その名の通り空に宝石を散りばめたようである。

クリスマスマーケットも楽しい。各地で開かれるが、私に一番馴染みのあるのは、チューリッヒである。チューリッヒ中央駅の広場には、降臨節の間、たくさんの屋台が並ぶ。服飾品や小物雑貨を売る店に混じって、食べ物の屋台もある。焼きソーセージやラクレット、クレープなどの定番の食べ物はもちろんのこと、アジアンフードの屋台もある。そして、何と言っても欠かせないのが、ホットワイン。赤ワインに、クローブやシナモン、その他いろいろな香辛料、オレンジやレモンを入れて沸かした冬の飲み物だ。寒い屋外で飲むには打ってつけである。友達との待ち合わせや、電車待ちの時間にちょっと一杯。マーケットは、中央駅だけではなく、旧市街にも立つ。駅から、リマット川右岸のニーダードルフ通りの屋台を覗きながら、チューリッヒ湖近くのオペラ座に向かうのも、風情のある散策路だ。石畳の暗い街並みが、イルミネーションに淡く照らし出される。オペラ座前の広場も、大きなクリスマスマーケットで賑わう。例年は、まったくのオープンスペースなのだが、今年は、入り口を設けてコロナ証明の提示を求めている。

12月6日は、子供たちにとっては特別な日。サンタクロース（St.Nikolaus）がやってくる日だ。シュムッツリ（Schmutzli）と呼ばれる、顔中を煤などで黒くして、黒っぽい装束を纏った怖いお供を引き連れ、胡桃や落花生、蜜柑や焼き菓子などを入れた大きな頭陀袋を担いでやってくる。村

や町の広場に来るときは、たいていロバも一緒だ。行列をするところもある。サンタクロースは、小さな子供がいる家庭にもやって来る。親たちは、オーガナイズでけっこう忙しい。まずは、サンタさんを探しておかなければならない。たいていは、親戚の男性や、友人知人に頼むことが多い。そして事前に、自分の子供の学校や家庭での様子を知らせておく。一方で、子供たちには、サンタクロースの前で披露する詩や歌の準備をさせる。我が家も、子供が小さかった頃は、12月6日は特別な日だった。ありがたいことに、息子のGötti（ギョッティ　洗礼に立ち会って、親に何かあった場合には父親代わりとして子供を援助する人）に、ちょうど同じ年頃の男の子が二人いたので、いつも呼んでくれて一緒にお祝いした。彼は地元育ちで顔が広いので、たくさんサンタさん候補を知っている。我々親が事前に渡しておいたメモをもとに、褒めたり注意したりするサンタクロース。その前に神妙な顔をして座っていた小さな男の子たちの姿が、今も懐かしく目に浮かぶ。

去年は、クリスマスがちょうどロックダウンになってしまった。今年は、今のところ通常通りだが、新しい変異株も出てきたということで、これからどうなるかわからない。来年こそは、コロナが収束することを心から祈っている。

対詠　ごきげんいかが？　PART 80　〈2021 - 22〉

ＫＮＯ　小野澤繁雄
布宮　慈子
河村　郁子

庭先に爪切る音のひびきおり坂東十一番かたわらの家　10月14日　O

阿蘇山が噴火したらし山形は寒くなり今日ストーブ点けた　10月20日　N

季ごとに愛でし桜に紅葉なく立冬迎ふ　枯れ葉を拾ふ　11月4日　K

生垣に伐りくれし実の二つほど郁子なるものをしばらく飾る　11月8日　O

月山が白い帽子をかぶつたよ紅葉する山のもつと向かうに　11月15日　N

庭うちの千両の実のたわわなり朝な夕なに朱色の声かけ　11月25日　K

歩く人の出番のような時間ありここに先生と呼ばれる人　11月29日　O

雪降りのきのうの天気うそのやう晴天のなか弾んで歩く　12月14日　N

老いたれど三着ならべて着衣決むスマホに今日の気温を訊きて　12月17日　K

単車でくるサンタさんともみていたにピザではなくてヤクルトの人　12月24日　O

２０２２年

夜遅き時間なれどもピザ屋さん雪の轍（わだち）をヨロヨロと行く　1月4日　N

積雪の10センチほどに幽閉され七草がゆをとくと賞味す　1月9日　K

前号作品短評Ａ〈小野澤〉

●熱量をもちゐし人を失ひてわれらのこども食堂　雨降り　　布宮慈子

ここでいう熱量ということばは今もある。一般には熱意だったろうか。熱量は物理的な数字でもある。同意でエネルギーも使われる。一連「こども食堂」のさいしょの歌。われらのこども食堂とあるので、熱量をもちゐし人、はなかでのリーダー役だった人のことか。結句「食堂　雨降り」で、雨降りも物理現象。雨降り、ここは比喩的な使い方になる。一字あけで一呼吸、やや強い断定となった。われらの、の強い気息、歌にも熱量をみるようだ。

正義感の塊のやうだつた、また姉御肌、最後の声などこの人を説明する歌がつづく。そこからまた、おもいがひろがった。

心配な子たち居たよね東京の団地にも　憂ふるだけの私たちだつた

〈私たち〉のもつ空間性がつたわってくる。地域で、より積極的なかかわりは今のもの。

こども食堂は地域食堂　再開のめどが立つのはいつか考へてゐる

●命とはかくなるものか年重ね安きにありて目覚め危ぶむ　　市川茂子

目覚めや就寝時には、なにか反省的になるような機微がある。危ぶんでいるのは、命の現在か。老後ということでもある。ただ、安きにありて、にこの作者らしい自覚がある。一小説に、怠りという言葉があって、これがキーで、小説全体を説明するものにしていたが、ここでは、安きにありて。一つ前の歌、明け方の夢にも手がかりはある。この歌で、君は今はないご夫君（ふくん）。

大空に君の手を取り飛び立ちて天の川に入る明け方の夢

時早く過ぐとう詩人ならずとも老いゆくわれの時はいつまで

下句、老いゆく時間にも終りはあるものの、そこまでは老いゆくしかない時間である。そこに呟きも独白（モノローグ）もあるのは〈独り〉だから、でもある。

●八方の仮想の敵と対峙する徒手空拳の五体を研ぎて　　梅津純子

一連タイトルが「徒手空拳」。徒手空拳は、武器を持たないこと。八方は、四方（東・西・南・北）と四隅（北東・北西・南東・南西）のこと、あらゆる方面。五体は、頭・両手・両足の称、からだのすべての部分。（以上、『新明解国語辞典』第五版）

ほかの歌でもわかるように、この夏の東京オリンピック二〇二〇でのもの。競技は、沖縄空手の「形」（その演武、五首目）。

一連で、最初の三首までが水泳、そのあと五首が沖縄の空手ということで、空手のそれも女子選

手の「形」に、強い印象があった。これは、こちらにも覚えがある。

琉球にもおもいは及ぶ。

武器持たぬ琉球に生るる護身術空手の演武に心身の覚む

琉球王朝は軍隊というものをもたなかったと昔読んだ。そこから、つぎのような歌にもなった。

侵すなく護らむ備へ怠らず沖縄の空手「九条」に重ぬ

ただ、軍備はあったようで、戦の絵も残っている。このことでは、文官優位の国が東アジアには多く、朝鮮王朝でも同じ事情はあっただろう、という。

前号作品短評B〈慈子〉

●若さとはかくなることや十八の喉流れゆく昼のそうめん　大橋千佳子

いい歌だ。若さに対する素直な驚きを示し、素麺が通るのどに注目して描写。語の並びも自然で、難しいところがない。これは作ったというより、生まれた歌であろう。

ＳＮＳ駆使する子らに授業するＷｏｒｄ文書は古文の如し

ソーシャルネットワーキングサービスの略であるＳＮＳ。いまやスマートフォン等を持つ人にとっては自由自在に操って情報を得たり、インターネット上で人との交流をしたりすることは普通のことになっている。その若者たちには（Microsoft）Word のソフトにより作成された文書は古典の部類に入るのではないかという。面白い気づきである。教える側と教わる側のギャップをうまく提示している。

健常と障害の区別乱暴健常という違和感を生く

「パラリンピックをテレビ観戦」との詞書がある。自分は健常者とされているかもしれないが、違和感をもってこれからも生きるのだ、という表明。一連のタイトル「隔たり　または距離感」に通底するものがある。

●アフタヌーンティーに大切はいっしょに飲むことそれのほかはどうでも　小野澤繁雄

ことばが省略されており、最後は言い差して終わっている。アフタヌーンティー（午後のお茶）に大切なのは誰かと一緒に飲むことであって、そのほかのことはどうでもいいと僕は思うよ、くらいの意味か。省略の部分は、読者がそれぞれの考えで補ってもいいわけで、そこに作者のねらいがあるのかもしれない。

市内（まちうち）は徒歩圏の店に喫茶店名をトワトワト今もあるのか

歩いて行けるところにトワトワトという喫茶店があったのだが、今もあるのだろうか。喫茶店そのものが懐かしい響きであり、作者の知るトワトワトは恐らくもうないのではないか。確かめることは寂しさにつながるから、そうはしないでおく。喫茶店からカフェに移り変わる時の流れ、自分も同じ時間を生きてきたという感慨にひたっているようでもある。

●音のみを頼みて挑む「ゴールボール」の一球ごとに心揺さぶらる　河村郁子

パラリンピックが開催され、ゴールボールという競技に引き付けられる作者。旧約聖書を手にして、あらためて人間というものを考える機会となったようだ。

産まれ来し数多（あまた）の人間（ひと）に神様はみ光恵まぬ人間（ひと）を創れり

補助となる器具も用具も少なかるブラインド競技に思ひの募る

オリンピックよりもパラリンピックのほうが人の心を揺さぶるのだろうか。幾人かの作品に現れる気づきは、一過性ではないようである。

●夕立来て湯気ぼうぼうと沃土（よくど）あり　新野祐子

大きな景の句である。夕立は、俳句では「ゆだち」と読むことが多い。どしゃぶりの雨が降り注いだところは湯気が出ていて、肥沃な土地なのだ。夕立は日本的だが、一読してロシアか中国の土地のような錯覚を起こした。

撒水者（さんすいしや）よぎり言霊よみがえる

水をまく車が通ったときに言葉のもつ力を改めて感じた、という。よみがえった言霊とは何か。深読みしてみる。二〇二一年、沖縄戦から七十六年の「慰霊の日」に平和祈念公園で戦没者追悼式が開かれた際、中学生が朗読した詩。自作の素晴らしい詩で、力強い声が話題にもなった。あるいは、広島や長崎の平和祈念式で語られた「平和への誓い」。いずれか、またほかのことかもしれないが、読者の想像を喚起させる一句であった。

〈エッセイ教室「清紫会」の作品より〉

食べること色々

市川茂子

朝のテレビで、新しい野菜の食べ方を色々と紹介している。

第一位に上げたのが、ホットプレートで作る焼き茄子だった。茄子が大好きなので、もってこいの簡単な作り方である。茄子を縦二つに割り、皮に網目の包丁を入れて片面を三分焼き、返して三分焼くだけという。朝の用事をしながら見ていたので、味付けの場面を見逃してしまった。食べるところで、かつお節がまぶしてあって、おいしそうな食べ方をしている。

早速作ることにしたが、ホットプレートがないのでフライパンで代用して、自分流の味付けをして食べた。茄子はどんな料理でもおいしい。毎日の生活では同じ物ばかりというわけにはいかない。

バランスの良い食事をとか、一日に三十品目、三食しっかり食べるようになどと言われたこともあった。今は一人暮しの年寄りになって、作ることはもちろん、食べることさえ面倒になってきたと思っていると、料理研究家の土井義晴先生の『一汁一菜でよいという提案』が新潮文庫の新刊として新聞広告に出ていた。

コロナ禍の自粛を気にしながら、ほかにも調達しなければならない物があったので、思いきって街の本屋に行って他の本まで一緒に買ってきた。

本の帯には、「ご飯と具だくさんの味噌汁。それでいい」「家庭料理に革命をもたらしたベストセラー」とある。最初の「今、なぜ一汁一菜か」の項「食は日常」に、「この本は、お料理を作るのがたいへんと感じている人に読んでほしいのです」とある。

あまり手間をかけずに作れそうな気がして、参考にしながら楽しく食事が出来るようにしようと思う。が、一汁一菜と漬物だけでは物足りないような気がして、長年のやり方で自分流になってしまう。スーパーなどの買物に行くと食べたいものは勿論のこと、安売りの物や野菜など、すぐ使わなくても目先にあるものにすぐ手を出してしまう。

「手早く作る味噌汁の具だくさんは、おかずを兼ねることになるし、ダイエットにもなる」という。家庭料理よりも自分革命が先だと思いながら、一汁一菜に慣れるまでには時間がかかりそうだ。

木枯しが身にしみる季節になると、コロナの巣ごもりよりも冬眠したくなるのだが、そんなことは考え直すしかない。また年末年始がやって来る。例年のように食べ物を用意しなければと思う。一人分だと具だくさんの味噌汁で間に合うのに、来てくれる人たちには一通りのものを取り揃えなければならない。これからは食べ物を少しずつ買ってきて冷蔵庫や冷凍室に詰め込んでいかなければならない。来てくれた人たちにはこの本を見せようと思っている。

無二の会短信

◆二ヵ月ごとのカレンダーも、残り一枚の半分が過ぎた。コロナ騒ぎや選挙などであわただしかったこの一年も終りに近づいている。朝起きても何の変化もない生活で、一日一日が過ぎてしまう。あの人もこの人もと思いをはせながら、お逢い出来る日を楽しみに待つことにしよう。少しずつ身の回りの物や不用品などの整理をして、身も心も軽く健康になるように祈りながら、穏やかな日々であることを願っている。

市川茂子

◆二〇〇六年、バンクーバーで「密航船水安丸」渡海百年の記念行事があり、関係者の子孫、カナダ側日本側あわせて五百人が集った。会が果てようとした時、銀髪の女性が長い巻物を広げて私たち姉妹に懸命に話しかけてきた。ローマ字で書いた家系図を示し、私たちとの繋がりを聞くのだった。そこに父祖の名を見て、異国で代を重ねた彼女のルーツを求める悲願が伝わり、私たちの心は激しくゆさぶられた。父の従姉の娘、再従姉妹（またいとこ）の出現が夫と兄の十五年に及ぶ研究の基となり、この度ようやく出版にこぎつけた。『カナダ移民のパイオニア　佐藤惣右衛門物語』である。

梅津純子

◆秋が深まるころから連鎖のごとく、給湯器、ヒーター、ガスレンジが故障した。二十年余、何事もなく稼働してくれたのが稀有なのかもしれない。現職を退いて後、「寝に帰る家」から「住まう家」に変わり、設備・家電も人並みに使うようになったのも一因か。足元が崩れることへの動揺は思った以上で、何やかや言っても恵まれた環境にあることを意識していない脆い自分、危機管理力のない自分を痛感している。

大橋千佳子

◆さあこれからと思っていたら、パソコンが立ち上がらなくなった。ここにきて不調はあって、使いづらさは確かにあった。職場で使っていたパソコンのＯＳは、定年間際は Win7 で、定年後、たぶん人生でさいごのパソコンと、思い切って買ったパソコンのＯＳが Win8 だった。店頭にはまだ Win7 のものが少し安くなって出ていた。今回、修理代やメーカーに出すと初期化されてしまう、また Win8 のサポートが間もなく終わる、などから、店頭のすすめで、買い替えた。パソコンも、今のくらしのインフラのひとつだとじぶんの場合ではおもう。人によってはスマホだろう。こんどのＯＳは Win10 だが、これのサポート期限まで、生きているかどうか、ほんとうにさいごのパソコンになるのかどうか、やや不確かなところにいるようだ。

小野澤繁雄

◆毎朝、霜が降りるようになり、日ごとに寒さが増して来ている。採り残した白菜がまだ畑にある

が、寒さとともに一段と甘くなったと感じている。寒さから身を守るために甘くなると聞いたことがある。本当にそうなのか白菜に聞いてみたい気がする。この時期の白菜は、ちょっと刻んでサラダにして食べても美味しい。「霜降や青物白く抗ひて」　神村ふじを

◆またしても、オミクロンとやらのパンデミック。老体にして自粛専一の日常に慣れてきたのか、出かけることが億劫になります。「火の元、戸締り、眼鏡に、マスク、スマホ等々」外出一式を貼り出しても忘れ物あり!!　私のニュー・ノーマルはどうなるのか楽しみです。相変わらず、介護の補佐の補佐をしています。　河村郁子

◆コロナ禍の中で迎える2回目のクリスマス。今年は、去年と違ってレストランも開いていて、街に人出はありますが、感染の広がりへの不安は隠せません。スイスの人々の間にもマスクがすっかり定着しました。2年前にはまったく考えられなかったことで、なんだか不思議な感じです。来年こそは、良い方向に向かいますように。　ギンジック恭子

◆コロナ禍も収まりかけたかと思うと変異ウイルスの出現に、また不安が煽られている。ここ二年ほど人との距離間が明らかに違ってきた。簡単に人と人とが直接接する機会が減ってきてオンライン

ンや自問自答が多くなった。他人と話すだけで、胸のつかえが取れることがあったが、今は簡単でない。だが、思い立って先日、大阿闍梨の光永覚道氏に会いに比叡山南善坊の宿坊にお邪魔した。会えて良かった。人に会ってみる、話してみる。それだけで何かが変わってくる。自分の「耳で聞き、目で見て、足で歩くこと」を大事にしたいと、ますます思う今日この頃です。迷ったら行動したい。　新関伸也

◆菅野芳秀（かんのよしひで）さん（山形県長井市在住）がこの十月、『七転八倒百姓記』（現代書館）を出版した。菅野さんにとっては三冊目の本だ。一冊目は、長井市民の台所と農家を結ぶレインボープランについての『生ゴミはよみがえる』（講談社）、二冊目は、自分のなりわいである養鶏をめぐっての『玉子と土といのちと』（創森社）。今回は、全国で孤軍奮闘している人たちへの励ましとなるような本をという編集者の要望に応えて、七年前着手したという。二〇一七年、菅野さんは思いもかけぬ脳出血に襲われた。懸命のリハビリに励み、二年半後だいぶ回復し、機能が戻らないところは妻の助力で出版に漕ぎ着けた。先日、仲間の百姓交流会が主催し出版祝賀会が開かれた。妻佐智子さんの、夫への叱咤激励がひときわ光っていたのはいうまでもない。一九八六年、菅野さんはアジア太平洋資料センターの人たちと「日本フィリピン農民連帯センター」を立ち上げた。翌年二月の第一次派遣団に、菅野さんは私を誘ってくれた。あのルソン島、ミンダナオ島の一週間の鮮烈な旅

がなかったら、私は農業の世界に飛び込んではいなかっただろう。菅野さんにはとても感謝している。

新野祐子

◆年が明けると、親しい友人たちの家をお互い訪ねたり訪ねられたりするのだが、今年はだれとも会っていない。電話でのあいさつだけ。コロナ禍はいったいいつになったら終わるのだろう、と思っている。

松井淑子

◆ついこの間、きれいに雪かきをされた道を歩いた。雪かきをしてくれた人の姿はもうなかったけれど、誰かがしてくれなければ、この道はとても歩けなかったな、そう思ったとき、訪問介護の仕事は「雪かき仕事」だと思った。利用者さんの毎日の歩みを止めないように、歩みを邪魔している雪を払いのけているかのごとく、その方の家を訪問する。掃除をしたり調理をしたり買物をしたり、生活の歩みが滞らないよう、ヘルパーは細々と働く。でも、雪かき仕事だから、なかなか褒められもしない。雪かき仕事だから、サボることもままならない。それでも、ヘルパーたちの毎日毎日の積み重なりを経て、利用者さんは今年一年、歩むことができたようだ。年末にたくさん感謝の言葉を一身に受けながら、これからも胸を張って「雪かき仕事」に誇りを持ち、生きていきたいと思う。

山内裕子

編集後記

◆今回は、オリンピックやパラリンピックに関する短歌作品が散見された。とりわけパラリンピックの映像から受けた印象が強かったようだ。当方、テレビは見ないし、五輪関連もまったく見ていないのだが、パラリンピックのほうが話題になったことは知っている。パラリンピックも同時期に開催したらどうか、という意見があった。賛成である。

◆新関伸也さんが取り上げた今村翔吾の『塞王の楯』がいま注目されている。第１６６回の直木賞の候補作になっているからだ。その今村さんは作家業だけでなく、昨年、大阪で廃業寸前だった書店の経営を引き継いでいる。小学五年で池波正太郎の作品に出合ってから、彼にとって書店は特別な場所であったようだ。「本によって自分の人生は大きく変わった。その恩返しをしたい」という。書店経営でも次々とアイデアを出し、作家のネットワークも生かしてイベントの企画やサイン会を開催、売り上げ増を目指す。直木賞の選考会は、今月十九日の午後に開かれる。さて、どうなるだろうか。（その後、芥川賞・直木賞の発表があり、今村翔吾著『塞王の楯』が直木賞に決まった）

◆前の号で触れた「こども食堂（地域食堂）」は、その後、お弁当を作って渡す方法で再開した。クリスマスのときは盛り付けも工夫したからか、お弁当を食べた人からわざわざお礼の電話があったという。担当した班一同、メールのやりとりで盛り上がった。今年度中は、お弁当方式でいく予定。早くコロナが収まってくれることを願っている。

◆昨年末だったか、参議院議員の福島みずほさんがツイッターで紹介していた本があった。中島京子著『やさしい猫』という小説。中島さんの本は、わりに好きで読んでいる。みずほさんがなぜ？と思いながら図書館にリクエストした。予約の順番が回ってきて読み始めたら、展開が気になって一気に読んでしまった。二〇二一年三月、スリランカ人のウィシュマ・サンダマリさん（三十三歳）が名古屋市にある入管施設で収容中に亡くなったことは記憶に新しい。日本に来て難民申請している人への非人道的な扱いや入管施設の「長期収容」問題など、悲しいかなウィシュマさんの死をきっかけに次第に注目されるようになった。むずかしくない『やさしい猫』、おすすめである。

（布宮慈子）

muninokai.com

上記のサイトでは、フルカラーのオンライン版「展景」を公開しています。
61号からのバックナンバーも読むことができます。

季刊 展景 104号
二〇二二年一月二十五日　発行
編集・発行人　布宮慈子
制作　スタジオ・マージン
無二の会「展景」発行所
山形市上町二―一―七―二〇二
info@muninokai.com

Copyright © 2022 MUNINOKAI. All rights reserved.